

## 外貨建ての債権・債務を 決済・換算したときは？

慣れないうちは取引があったとき、どんな勘定科目で処理すればよいのか、悩むケースもあるでしょう。そうした勘定科目の取扱いについて、新人さんと一緒に、事例をもとに学んでいきましょう。



新人さん：円安がすっかり定着してしまいましたね。

先輩：本当だね。2022年は1ドル115円のときもあったのに、こっちは150円だものなあ。

新人さん：2年前って、1ドル115円だったのでしたっけ？

先輩：うん。単純に約30%の下落だから、企業努力で何とかしのいでいるとはいっても、うちのよう輸入業者にはつらい時代だよ。

新人さん：そうですね。この間、友人がハワイに旅行したとき、ハンバーガーを円に換算したら、高くてビックリしたと言っていました。

先輩：そうだろうね。その分、海外から日本にやってくる旅行者にとっては、日本は割安に映るのだろうね。

新人さん：はい。インバウンド需要が増大するわけですよな。

### ●解説

「為替差益（損）」とは、外貨建ての債権・債務を決済

したり、外国通貨や外貨建ての債権・債務を円に換算した際に、為替相場の変動による差額を処理する勘定科目です。為替相場の変動により生じた差益を「為替差益」、逆に差損を「為替差損」で処理します。

外貨建取引は、取引発生時の為替レートによる円で換算されます。一方、決算時における外貨建ての資産・負債に関しては、決算時の為替レートによって円換算されます。

外貨建取引によって生じた債権・債務の決済に際して発生する決済差損益や、決算時における外貨建ての資産・負債の円への換算によって生じる換算差損益は、ともに「為替差益（損）」として、当該事業年度の損益に計上されます。

損益計算書の表示にあたっては、決算時に「為替差益」と「為替差損」の両方が生じた場合、両者を相殺した純額で、「為替差益」ないし「為替差損」のどちらかを一方を営業外収益ないし営業外費用として表示します。ただし、金額的に重要性の乏しい場合には、「雑収入」や「雑損失」に含めて表示しても構いません。

### ケース1

#### 取引発生と決済の場合

・米国で商品10,000ドルを仕入れ、代金は翌月末に支払うこととなった（取引発生時レート：1ドル140円）。

<b>【借方】</b>	仕入	1,400,000	<b>【貸方】</b>	買掛金	1,400,000
-------------	----	-----------	-------------	-----	-----------

・米国で上記の商品を20,000ドルで販売し、代金は掛けとした（取引発生時レート：1ドル140円）。

<b>【借方】</b>	売掛金	2,800,000	<b>【貸方】</b>	売上	2,800,000
-------------	-----	-----------	-------------	----	-----------

・上記の買掛金が小切手で決済された（決済時レート：1ドル150円）

<b>【借方】</b>	買掛金	1,400,000	<b>【貸方】</b>	当座預金	1,500,000
	為替差損	100,000			

### ケース2

#### 決算時の換算の場合

決算にあたり、ケース1の売掛金20,000ドルを円に換算した（決算時レート：1ドル160円）。

<b>【借方】</b>	売掛金	400,000	<b>【貸方】</b>	為替差益	400,000
-------------	-----	---------	-------------	------	---------